

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第62号 2010年5月21日(金)

発行：歴史資料ネットワーク



▲ いわし博物館爆発事故後の史料修復作業



▲ 兵庫県立歴史博物館での展示準備作業のようす

CONTENTS

- 巻頭言
 運営委員としての3年間を振り返って——森脇 崇文(2)
- 特集 千葉県文化財救済ネットワークシステム
 構築推進事業の設立経緯と事業計画——新 和宏(3)
- シンポジウム 震災の経験を“伝える”
 —今に継承される関東大震災と阪神・淡路大震災の〈記憶〉—
 —板垣 貴志・吉川 圭太・兒玉 州平(5)
- 兵庫県立歴史博物館ミニ展示「水損した歴史遺産を救う」
 —2009年台風9号豪雨被災古文書を中心に—(8)
- 【連載】史料ネット 古文書返却の旅 その一 森本家文書——河野 未央(9)
- 2009年台風9号被災史料救出活動支援募金ご協力の御礼——(11)
- 2010年度歴史資料ネットワーク シンポジウム開催のお知らせ——(12)

運営委員としての3年間を振り返って

森脇 崇文

私が史料ネットに関わるようになって、もう丸3年が過ぎようとしています。右も左もわからないまま勢いだけで個人委員に飛び込んだ2007年度。大阪歴史学会からの出向委員に転じた2008年度。そしてこの2009年度には、名ばかりとはいえ副事務局長という不相应な役職まで拝するに至りました。悪戦苦闘の日々でしたが、今振り返るとあっという間だったような気がします。この4月より、私は徳島市教育委員会に学芸員として採用され、市立徳島城博物館に勤務しています。それにともない、2009年度末をもって、ひとまず史料ネットの仕事からも離れることになりました。今回はこの巻頭言の場をお借りして、今まで支えていただいた皆様へのご挨拶と、私なりの史料ネットへの思いを書かせていただきたいと思います。

私の運営委員としての初仕事は2007年6月、2004年の台風23号で被災した兵庫県豊岡市の出石町日野辺区有文書の返還式への参加でした。当日のことはニュースレターの第50号に参加記として執筆していますが、今でもその時の様子はハッキリと思い出されます。特に印象に残っているのは、公民館に集まった地元の人たちが展示された史料を見つめる熱い視線、身を乗り出して展示解説に聞き入る姿、そしてミニ・シンポジウムが終わった後に沸き起こった暖かい拍手です。史料の救出と整理のみを史料ネットの役割と思い込んでいた私は、その光景をみて、史料ネットのより深い役割に気づかされました。災害にあった史料を単に「死なせない」だけでなく、災害を契機としてその史料が持つ意味を再発見し、地域に伝えていくこと。つまり、史料を「生かす」という仕事の重要性を実感したのです。

それから3年。正直なところ、私がどれだけ史料ネットの活動に貢献できたかはよく分かりません。特に昨年の台風9号への災害対応に際しては、自分の研究や他の仕事とのせめぎあいの中で満足に現地入りもできず、思い悩むことも度々でした。ただ、それでも私が委員となったことで、少しでも史料を「生かす」活動の手助けができたなら、それは本当に光栄なことだと思います。

いま、史料ネット事務局の運営体制は世代交代の最中にあり、若手メンバーを中心に新たな展開をみせつつあります。その中の一人として、この重要な時期に委員を抜けるのは心残りなのですが、幸いにも私以上に若く有望な後任委員を見つけることができました(それも二人も!)。彼らを加えて、史料ネットはさらに飛躍していくことでしょう。私自身も、今後は側面から事務局に協力していければと考えています。

また、新天地となる徳島市は、将来的に南海・東南海地震の発生が危険視されている都市です。史料ネットで培った経験を活かしつつ、少しずつ予防体制を構築していくこと。そして史料が持つ意味を多くの人々に伝えていくこと。博物館の仕事の中で、そうした試みを続けていけるように、微力を注いでいきたいと思います。

それでは皆様、今まで本当にありがとうございました。そして、これからもどうかよろしくお願いいたします。

(もりわき・たかふみ／歴史資料ネットワーク副事務局長)

千葉県文化財救済ネットワークシステム

構築推進事業の設立経緯と事業計画

千葉県博物館協会地域振興委員会委員 新 和宏

事業の背景

四方を海と川に囲まれているという半島特有の自然環境にある千葉県は、台風や地震発生時等において、その自然環境が被害を助長する傾向にあることを避けることができない。また、我が国最大級の埋蔵量を誇る天然ガス鉱床が分布していることは、大いなる資源保有という利点の反面、多大なリスクを抱えているとも言える。さらに、過去、発生した地震や竜巻等による被害も記憶に新しいところである。

このような状況の中で、平成 16 年 7 月、九十九里町いわし博物館において、天然ガスの流出による爆発事故が発生した。

同博物館は、昭和 57 年 11 月に開館後、イワシ漁に関する資料、約 46,000 点を収蔵するとともに、観光スポットとしても、地元はもとより観光客からも親しまれてきた施設である。

この爆発による被害は甚大であり、屋根や壁が広範囲にわたって吹き飛んでいる様子は目を疑う光景であった。爆発が開館直前であったため、入館者の被害は無かったが、業務にあたっていた職員 2 名（死亡 1 名・重傷 1 名）が被害に遭われた。加えて、イワシ漁に関する古文書等の収蔵資料も多大なダメージを受け、その救済は急務な状況を呈していた。

事故発生直後、九十九里町教育委員会から千葉県教育委員会に対して、被災資料の救済に係る協力要請がなされたことから、県文化財課が中心となり、地元ボランティア、県文書館、県史料研究財団、県立博物館、市町村立博物館の専門職員により暫定的な文化財救済チームを組織した。20 名以上の専門職員が、延べ 10 日間以上こわたって被災資料の救済・搬出作業を敢行した。これらの資料は、現在も、中央博物館の本館と分館に仮保管している。

この出来事は、自然災害に対応すべく全県レベルでのネットワークの構築、救済マニュアルの策定について、実践すべき急務の施策として示唆するには十分すぎる体験であった。

設立の経緯

前節の背景のもと千葉県では、翌年度より 3 カ年でネットワーク構築の必要性を共通認識するとともに、その具現化に向けて、県内の博物館、各教育委員会、文化財管理部署等を対象に、「千葉県文化財管理指導者講習会」を開催した。

ここでは、神戸や新潟の地震被害に関する状況等について、講師をお招きして聴講するとともに、文化財等を災害から守る意識高揚と、そのための課題抽出を行った上で、ネットワークの将来像を提示することにより意識の共有化を図った。

千葉県ネットワーク構築構想は、今までの経緯等をふまえて、博物館や行政を主体として事業展開を図る方向性を示していた。しかし、当事業の実施に際しては、単館が独自で起動するには事業内容が非常に多岐にわたる他、専門職である学芸員等の人材の利活用を推進するため、全県下での関係部署の連携が絶対条件として挙げられていた。

その折、21年度文部科学省の博物館ネットワーク構築推進事業の一環で、千葉県文化財救済ネットワークシステムの構築事業を実施することが具現化したため、県内の博物館ネットワークである千葉県博物館協会を事業実施主体として事業を展開するに至った。

千葉県文化財救済ネットワークシステム構築推進事業の計画

事業全体のフローは、平成21年度から3カ年を第1期とし、他ネットワークの実態調査、その課題抽出を経て、千葉県独自の資料ネットワークシステムを構築、強化する。

併せて、同ネットワーク事業において、最重要テーマとも言える「千葉県の自然・歴史・文化遺産を永続的に守る」システムを具現化する使命を实践するため、文化財関係者の資質向上事業と、県民の文化財保護に関する意識喚起の事業展開等を推進していく計画である。

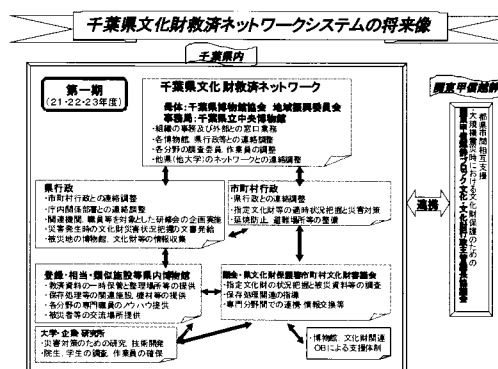
初年の平成21年度は、実態調査をもとにネットワークを立ち上げ、千葉県博物館職員研修会において、関連のシンポジウムを開催した。2年目以降は、ネットワークの強化と、具体的な調査等の実践を推進していく計画である。

○平成21年度

- ①実行委員会設立(主体:千葉県博物館協会、事務局:千葉県立中央博物館)
- ②実行委員会3回開催
- ③他の資料ネットワークの実態調査と課題抽出
- ④千葉県文化財救済ネットワークシステム構築推進事業に関連したシンポジウム開催
- ⑤平成21年度事業報告書作成

○平成22・23年度

- ①千葉県博物館協会総会において21年度事業と今後の事業計画の報告等
- ②ネットワークの強化(大学、文化財保護団体、研究機関、NPO等市民団体への拡充)
- ③他の資料ネットワークとの連携
- ④文化財保護及び県民対象の研修会、シンポジウム開催
- ⑤関連学会等における研究発表と学会誌への寄稿
- ⑥第二期事業計画案の構築



(しん・かずひろ/千葉県立中央博物館 教育普及課長)

シンポジウム 震災の経験を“伝える” —今に継承される関東大震災と 阪神・淡路大震災の〈記憶〉—

板垣 貴志／吉川 圭太／兒玉 州平

2009年12月19日(土)、人と防災未来センターにて、シンポジウム「災害の経験を“伝える”
—今に継承される関東大震災と阪神・淡路大震災の〈記憶〉—」(第9回 DRI 防災セミナー)が開催
され、木村光利兵庫県防災監による開会挨拶の後、140名の参加者を交え活発な討論がおこな
われました。以下、趣旨説明、基調講演、報告、討論の概要を報告いたします。

趣旨説明

矢守克也(人と防災未来センター震災資料研究主幹)／兒玉州平(同震災資料専門員)

震災から15年という時が経過し、この間、震災を体験していない世代は増え続け、今後時間が経過すると共に、ますます増加することに注目する必要がある。震災の記憶を継承していくとすれば、この事態に対処する必要がある(記憶の「消失」の問題)。

その一方で、記憶も、震災を記録した資料も、常に震災そのものを伝えていくのではなく、社会状況や大事件、戦争といったものを取り込みつつ、再構成されていく。時間は、記憶を歪ませていくことにも注目しなければならない(記憶の「歪み」の問題)。

最後に、問題とされたのは、次世代に向けて記憶の共有が、どのように果たされていくべきかという点である。この点については、「口で語る」方法もちろん重要ではあるが、それは永続的な方法として十分ではない。そのため、記憶を伝えていくための媒介として注目されるのが資料である。同時に、これをどのように扱うことで共有が実現するのか、そのことも考えなければならない(記憶の「共有」の問題)。

基調講演 1「震災資料が果たす役割 関東大震災の記録から何を学んだか？」

室崎益輝(人と防災未来センター上級研究員)

室崎講演が対象としたのは、「歪み」と「共有」の2点であった。関東大震災の記憶は、その後の総力戦の中で大きく歪められた。例えば、関東大震災で住民がバケツリレーで消火に成功したとされたことから、大戦中はその重要性が喧伝された。ところが、報告者は、これは風向きが変わったためだけに過ぎなかったことを明らかにする。それにも関わらずバケツリレーに対する妄信は、現在にも継承されていることを危惧する。一方で、室崎氏がこのことを明らかにし得たのは、寺田寅彦が作成した『火災動態図』という資料があったためである。この50年も以前に作成された資料が、報告者に関東大震災の記憶を伝えた。それは、この資料は主観が入らず、一方で重要な情報は全て書き込まれていたためであり、そのため、時を超えて「共有」が実現した。この

ように「共有」が果たされるためには、資料の作成の仕方そのものも非常に重要であると説明した。

基調講演 2 「資料が語る関東大震災 ―86年の時を超えて―

北原系子 (立命館大学歴史都市防災センター教授)

北原講演は、資料がいかにより「消失」を救う存在であるか関東大震災を事例として、実証的に分析した。被災民は当日、どのように行動したのか、どこに避難し、どこにどれだけ集結したのか。それを迎える側はどうだったか。政府の動きはどうだったか。これらのことを次々と明らかにする課程で、関東大震災の記憶を持つ人がほぼいなくなるという事態の中で、いかに資料が大きな力を発揮するか、そのことがまざまざと示された。北原講演では、一方で、関東大震災の事例を今日的意義のあるものとするために、資料を用いてその姿を完全に明らかにするだけでは意味がないとした。そこから新たに「自分たちにとって生活の再建ができるような防災」を抽出することが大切であると結論付けた。

報告 1 「関東大震災の慰霊・展示施設・東京都慰霊堂と復興記念館」

高野宏康 (神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員)

高野報告は、関東大震災の記念日が、この 86 年間、どのように継承されてきたのかに焦点を当てることで、その「歪み」と「共有」の問題を分析した。関東大震災直後の慰霊のあり方や、それを記念する施設の建設は、当該期の社会状況に強く規定された。さらに、記念行事も、1930 年代に入ると、防空演習が組み込まれることが恒例化していく。また、敗戦直後には、震災記念堂は戦死者との合祀となって東京都慰霊堂と名前の変更を余儀なくされる。さらに伊勢湾台風や東海大地震がクローズアップされるに従い、記念日は防災の日として位置付けられていく。このように、関東大震災とは、ある意味切り離されてしまい、収集された資料は死蔵された状況が続くことになったのである。

報告 2 「地域文化と新潟県中越地震・中越沖地震」

矢田俊文 (新潟大学人文学部教授)

矢田報告は、「消失」を他の報告者とは違った角度から捉えた。大災害によって地域に根付いてきた記憶が失われるというのである。大災害が起こると、文化財や歴史資料が大きな被害を受け、このことが、地域の文化の「共有」を失わせることにもつながる。これを防ぐために重要なのは、①歴史資料を所管する機関の間でネットワークが形成されていること、②災害時に資料の救出を行う組織が常に存在すること、③災害時に救出した資料をどこに搬入するか、搬入先が確保されていること、④一つの蔵から紙資料は紙資料の専門家が、民具は民具の専門家が別個に救出するのでは、結局資料の散逸に繋がり、記憶は失われてしまうので、蔵の所蔵物をまとめて救出すること 4 点であると論じた。

報告 3 「記憶を『表現』から考える」

笠原一人 (京都工芸繊維大学大学院助教)

笠原報告は、「共有」を、大災害の非体験者に伝えていくためにどうすればいいか、という観点から、記憶が被災者だけのものであってはならないとする。震災そのものを再現したり、悲惨な体験談を聞いたり、それらは非常に重要であるが、それだけでは、聴く側、見る側が「同じ立場には立てない」という受身的な立場に置かれ、記憶が共有されたとは言えない。100年後、1000年後を想定すると、再現という手法では、それを伝える人も当然いなくなるわけで、「当時を重視する」ことにこだわるあまり、かえって「消失」が進むことにもなりかねない。それを乗り越えて被災者でない人、未来の人に伝えるためには、もっとそれらを聴く、見る人が主体的に関わって、本人が当事者となる必要があると結論付けた。

討論

討論の議題として挙げられたのは、記憶の「消失」「歪み」「共有」を踏まえた上で、震災の経験を伝えていくためには、どうすればいいかという点であった。これに対し「二世帯をセットにした語りの試み」(矢守)や、「『型』、『範』、『筋』を示す」(室崎)、「資料に触れることで直に当時に接する枠組み作り」(北原)、「当時の文脈で資料を読み解き、その解釈の変遷を明らかにする」(高野)、「歴史家がまず、叙述という形で後世に伝えること。映像の効果的な使用」(矢田)、「資料への関わりかたの誘導を行う」(笠原)との応答があった。



続いて、人と防災未来センターへの期待について問かけがあった。それに対し「資料への関わり方のデザイン」(笠原)、「防災文化を担う組織として維持・発展」(矢田)「資料のもつ面白さとは何かを考えていく必要」(高野)、「『重みのあるおもしろさ』を伝える」(北原)、「資料を作った側の思いを、読む側が読みとる」、「おもしろさ」を伝える」、「様々な目的にあわせ、様々な答えを引き出せる素材として資料の作成。素材としての資料づくりは被災者としての義務」(室崎)との応答があった。最後に、司会より、15年たった今日でも、どう伝えていくか、人と防災未来センターとしてどのようにあるべきか、センター全体としてこのような問題を考えていくことはもちろんのこと、このような問題を議論できる場を作ること、様々な試みができる場をつくるのが一番大事であると総括した。

(いたがき・たかし／歴史資料ネットワーク事務局員、よしかわ・けいた／同運営委員、
こだま・しゅうへい／人と防災未来センター震災資料専門員)

■寄贈図書

『千葉県文化財救済ネットワークシステム構築推進事業

文部科学省平成21年度博物館ネットワーク構築推進事業』(千葉県博物館協会、2010年)

関西大学なこわ・大阪文化遺産学研究センター編『文化遺産学交流会』(同センター、2010年1月30日)

鳥取県立博物館『図録 日清・日露戦争と鳥取歩兵第四十聯隊の創設』(2009年)

伊藤忠雄ほか『地震災害への備えを考える—中越地震・中越沖地震で学んだこと—』(新潟日報事業社、2009年)

今津勝紀編『岡山史料ネットII』(歴史遺産の保全と活用をめぐる地域ネットワークに関する研究) (2009年9月)

兵庫県立歴史博物館ミニ展示

「水損した歴史遺産を救う

—2009 年台風 9 号豪雨被災古文書を中心に—

2009 年 8 月台風 9 号に際して史料ネットは、特に被害の激しかった佐用町・宍粟市を中心に歴史資料保全活動を行い、現在も活動は継続中です。そのなかでは、地元教育委員会や、兵庫県立歴史博物館学芸員の方々と連携しながら保全活動が進められました。

このミニ展示では、今回の保全活動の概要や、救出した資料そのものの展示とともに、水に濡れた資料に対する応急処置技術も紹介されています。史料ネットメンバーも、展示の作成にあたって、協力させていただきました（※会期：2010 年 3 月 2 日～5 月 5 日）。また今号のニュースレターでは、この展示を見学した方から匿名にて感想をお寄せいただいています。

昨年の被災資料保全活動の成果が、このような形で「展示」していただけたことに感謝するとともに、被災地の皆様方の一日も早い復興をお祈りしたいと思います。

「水損した歴史遺産を救う」展示評

私は「被災資料の展示」というものを見たのは今回が初めてだったので、とても真剣に見させて頂き、また様々なことを考えるきっかけを頂いたと思っています。

災害というのは多くの人が客観的にみたり、また他人事として受け止めがちではないかと思います。しかし今回展示されていたような「被災資料」を実際に目の前で見ることで、今までとは違ったかたちで災害自体のことや被災地・被災者の方々のこと、そして自分自身を取り巻くものについても見つめ直すことができるのではないかと感じました。

救われた資料は歴史的な価値があることはもちろんですが、その土地で生きてきた人々の生活が染み込んだものばかりでした。それはその被災地が特別なのではなく、私たちが日頃から大切にしているもの、また身近にあり生活の一部となっているものにも同じように歴史が詰まっているのだということに気づかせてくれました。展示でそれらを目の当たりにして今まで客観的に見てきがちだった災害に関して、これは決して他人事ではないのではないかと、被災された方々にも私と同じように展示から見て取れる以外にもっともっと多くの大切なものや想いがその場所には詰まっていたのではないかと、とより踏み込んで考えることができたように思います。

災害が起こってから気づくというのは悲しいことかも知れませんが、しかし災害が起きたときだからこそ、今まで目を向けていなかったものに気づき、また関わりをもっていなかった地域や人々が繋がるということはとても大事なことに感じます。私自身、今すぐに被災地や被災者の方々に何かできるというわけではないけれど、今回展示されていた被災資料は私のような第三者に今までになかった新しい一歩を与えてくれるものではないかと思いました。被災資料は歴史を伝えるものであると同時に今を生きている私たちを結び付けてくれるものでもあると感じています。今後のこのような被災資料やこれらの保全活動がより多くの方々に広まることを願い、歴史資料ネットワークの活動にも期待したいと思います。

【連載】史料ネット 古文書返却の旅

その一 森本家文書

河野 未央

はじめに

史料ネットが阪神・淡路大震災で被災した史料は、大部分については、所蔵者に返却したり、博物館・史(資)料館等の史料保存機関へ保管を依頼したりしてきた。しかし、震災より15年経った現在でも、実は史料ネットに借用状態となっている史料群も存在する。そうなる理由は様々だが、あるべき場所に保存・活用されてこそその史料、いつまでもこのままではいけないという思いは常々あったものの、なかなか実現できない日々が続いていた。いろいろな言い訳を積み重ねて今日まできたが、史料ネット運営委員の末席を汚し、かつ囑託身分ではあるものの、史料保存機関で働くようになった身としては、さすがに借用状態の文書が残っているという史料ネットの現状を見過ごすわけにはいけなくなった。というわけで、若干前置きが長くなったが、「フットワーク」が売りの史料ネットメンバーの中では、珍しいほど動きが鈍い私が、松下正和副代表の後押しを得てようやく踏み出した小さな「返却の旅」の一步について、以下、報告したいと思う。

森本家文書のレスキュー経緯について

森本家文書は、平成7年(1995)7月25日15時頃、明石市内大蔵本町の巡回調査の際に救出された史料である。仮整理のため、史料ネットが借用した。当時の調査票には、「文書をお返しする際にも、レスキューの必要が新たにおこっていないか、聞く必要有り?」とのメモが残っており、本格的な調査を行う準備のための借用であったと思われる。レスキューに際しては、奥様に応対いただいた。同じく調査票には、蔵に大きな被害があったとのこと、蔵には食器などはあるが、文書類は(見せていただいた古文書以外は)もうないので、との聞き取り結果が記されている。

森本家文書の保管・整理状況について

森本家文書については、レスキュー後しばらくはダンボール箱に文書を入れ、神戸大学文学部内の古文書室に保管されていた。平成19年度に行われた同大文学部校舎改築工事にともない、同大学人文科学系図書館地下倉庫に移し、その後人文社会学系図書館の貴重書庫へ移した。移動の際、文書を中性紙箱に詰め替えている。翌年、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターへと保管場所を移した。

なお、森本家文書については、すでに仮整理が終了していたようであるが、目録データの所在が不明であったため改めて整理を行った。仮整理段階で史料の付箋の挟み込み、破損史料(主として綴じ切れ史料)の中性紙封筒への封入はすでに終了していたため、本整理ではその状態を維持した。

森本家文書の内容

史料点数は10点。「商売往来」「算法」「地誌」等教科書類が中心である。年不詳であるが、森本氏へ贈られた漢詩が1点ある。また、「当用 中」というタイトルの史料が1点ある。これは、明石

藩役人の公務記録である。藩内の人事、藩主の参勤交代等の記事があるなど、断片的ではあるが、明石藩政の一端がうかがえる貴重な史料である。ちなみに、先に紹介した調査票には、森本家の初代は文政 13 年(1830) 末五郎氏からはじまり、朝霧町から分家したとの情報が記されている。

返却の様子

平成 22 年 1 月 25 日、松下副代表とともに返却史料を持って森本家を訪ねた。小雨が降る寒い日であったが、玄関先で奥様に應對いただいた。短い時間ながらも震災当初の被害状況にはじまり、いろいろなお話しができたが、震災より 15 年近く借用状態であったことのお詫びを快く受け入れてくださったことは何より嬉しく感じた。



当日はさしあたって史料目録と簡単な文書群概要(調査票)を持参して、史料の内容説明を行った。史料を未来にわたって個人で保存していく難しさを語られていたのが個人的にはとても印象深かった。それでも、史料ネットの活動趣旨を理解下さり、「少なくとも私の代では史料を守ります」と仰って下さったことは、今後続くであろう史料ネットの「返却の旅」を大きく勇気づけるものであった。森本氏にはこの場を借りて改めてお礼を申し上げます。

おわりに

私自身は、震災直後に大学に入学したが、じつは阪神・淡路大震災の被災史料レスキューには直接関わっていない。しかしながら、レスキュー活動がある程度終えたのちの史料ネットの活動には折に触れ、参加する機会を得ていた。何もわからないまま、先輩に誘われるままではあったものの、史料ネットが主催する歴史講座を聞き、また被災史料整理にもたずさわってきた。しかし、それは、史料が地域に還り、「活用」される瞬間を目にするという大変貴重な経験あったと今にして思う。「死(=廃棄)」に瀕していた史料が、新たに生命力を与えられ、地域の遺産となっていく過程を見つめることができたからだ。

森本家文書は、点数は少ないものの、今後同じように「命」が与えられていく可能性を秘めた貴重な史料群であることは疑いのないところである。森本家文書もまずは保存し、後世へ永く伝えていただくことを願ってやまない。

最後に一言決意表明の意味も込めて…。かつて「第一世代」が行った軌跡を私自身が歩むことができるのか、史料に「命」を吹き込むことができるのか、そしてそれを地域に還すことができるのか、はなはだ心許ないところではある。しかし、せめてもその一歩手前の「保存」の問題には、今後も積極的に関わっていきたいと思っている。

私の史料ネットの「返却の旅」ははじまったばかりだ。

※「古文書返却の旅」という表現は、著名な網野善彦氏の『古文書返却の旅—戦後歴史学の一齣』(中公新書、1999)からの引用である。

(ここの・みお／歴史資料ネットワーク運営委員)

2009 年台風 9 号被災史料救出活動支援募金ご協力の御礼

寄付者ご芳名(敬称略) 小野英夫、内田九州男

歴史資料ネットワークは、2009 年台風 9 号被災史料救出活動につきまして支援募金のご協力をお願いしてまいりました。みなさまの深いご理解と温かいご支援のおかげで、計671,629円の募金を頂戴いたしました。心より御礼もうしあげます。

なお、募金につきましては、史料ネットに参加する各学会にも協力をたまわりました。日本史研究会には会誌『日本史研究』(第 566 号、2009 年 10 月)に募金のお願いと払込取扱票を同封していただきました。また、大会会場にてカンパ箱を設置していただきました。大阪歴史科学協議会には、会誌『歴史科学』198 号に募金のお願いと払込取扱票を同封していただきました。大阪歴史学会には、各分会および HP でカンパの依頼をしていただきました。改めて厚く御礼もうしあげます。

事業報告および収支決算につきましては、2010年6月5日の歴史資料ネットワーク総会での議決ののち、ニュースレターおよびホームページ等でお知らせいたします。

歴史資料ネットワークでは、今後も被災史料救出活動を継続していく予定です。何かとご多用とは存じますが、今後とも歴史資料ネットワークの活動につきご趣旨を賜りまして、ご協力をお願いいたします。

◆お詫びと訂正

前号の支援者一覧のうち、松田之利様、横山伊徳様のお名前を、各々松川之利、横山甲徳(敬称略)と誤記しておりました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正させていただきます。 歴史資料ネットワーク

■ 下記のとおり、2010年度歴史資料ネットワーク総会を開催いたします。

日時：2010 年 6 月 5 日(土) 午前 10 時 30 分～

場所：西宮市大学交流センター講義室 1

(西宮市北口町 1 番 2 号 ACTA 西宮東館 6 階、電話 0798-69-3155)

アクセス：阪急神戸線 西宮北口駅より北東へ徒歩 2 分

対象：歴史資料ネットワーク個人会員(不参加の場合、委任状の提出をお願いします)

史料ネット NEWS LETTER No.62 2010年5月21日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後 1 時～ 5 時)

e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

被災史料救出活動のようす・詳細は日々ブログに更新しています。

http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net



2010 年度 歴史資料ネットワーク シンポジウム

市民社会の中で歴史資料を守り、伝えるために

ー歴史資料ネットワークの 15 年ー

1995 年 1 月 17 日に阪神・淡路大震災が発生し、同年 2 月 4 日に歴史資料ネットワーク(史料ネット)の前身である阪神大震災対策歴史学会連絡会が結成されてから、15 年が経ちました。この間、市民社会や学会・大学をめぐる状況も目まぐるしく変化しています。地方自治体の財政悪化に伴う博物館事業の見直しや、地域社会の結びつきの希薄化によって、歴史資料の散逸の危険性はますます高まっています。また、歴史の担い手を育てるべき学会や大学でも、大学院生の減少や成果主義の導入などによって、その役割を十全に果たしているとはいきれなくなってきました。

一方で、震災被災史料の救済からスタートした史料ネットは、水害への対応や市民講座の開催など、活動を多様化させ、その存在意義をつねに社会にアピールし続けてきました。地域社会のなかでも、歴史遺産を懸命に守り、伝えようとする動きが徐々に広がりつつあるようにみえます。

このように、これまで史料ネットが築いてきた経験を活用しながら、今後どのように新たな展開を目指すべきでしょうか。史料ネットの 15 年のあゆみと、市民社会における歴史資料の持つ意味から、考えてみたいと思います。

日時：2010 年 6 月 5 日(土) 13:00～17:00

場所：西宮市大学交流センター

(阪急神戸線 西宮北口駅より北東へ徒歩 2 分 ACTA 西宮東館 6 階)

講演：大国正美氏「史料ネットの 15 年を振り返って

ー在野アーキビストの是非論と史料保全と活用ー」

坂江 渉氏「阪神・淡路大震災と地域文献資料のその後」

市民団体による実例報告・パネルディスカッション

